

第28回国民文化祭やまなし2013

文芸祭「漢詩」(全日本漢詩大会)を開催

知られざる漢詩王国山梨で
詩情豊かな風雅の集い

本年2月1日から4月30日までの間、全国及び海外より569首の漢詩作品の応募があり、その中から、特別賞13首、秀作賞・入賞作品54首が決定しました。当日は、これら作品の表彰及び発表を行います。

また、大会では、記念講演及び特別賞の作品展示、アトラクションとして韮崎市文化協会舞踊部による歓迎の舞踊、韮崎高校・北杜高校書道部による書道パフォーマンス、詩吟による山梨県にちなんだ漢詩を舞う群舞等も行われます。皆さんのご参加をお待ちしております。

■日時 9月29日(日) 10時〜14時30分

■会場 東京エレクトロン韮崎文化ホール

□記念講演

■講師 石川 忠久氏(全日本漢詩連盟会長)
■演題 日本人の漢詩

〜山水をうたう詩〜

※入場料は無料です。



漢詩を舞う山縣博子さん

「漢詩をはじめたことにより、
『自然の見方』を
教わったような気がします。」

漢詩について国文祭韮崎市実行委員
内藤利信氏に話を伺いました。

漢詩とは何でしょうか？

漢詩は、漢字だけで綴った詩であるため、親しみにくい面もありますが、奈良時代に中国から輸入され、それ以来日本人の心を捉え続けてきた文芸です。短歌、俳句、川柳、現代詩と並び、静かに広く根付いている貴重な文芸ジャンルです。短歌、俳句、川柳などは、和歌の流れから生じてきた文芸で、明治時代に正岡子規等の手により確立されてきました。漢詩は、日本人によって作られた最古の漢詩集が、奈良時代の『懐風藻』であることから、文芸としても他に比較にならないほど長い歴史があるんです。

また、他の文芸と違い、漢詩は作成する基本的なルールが、その時代よりまったく変わっていません。古い詩、新しい詩、また中国の詩など、変わりなく鑑賞することができます。

日本で漢詩の盛んだった時代
はいつごろでしょうか？

江戸時代に、頼山陽や広瀬淡窓という先駆者が活躍し、庶民に爆発的に広まりました。

特に江戸後期の文化文政のころは『唐詩選』という漢詩集がベストセラーとなり、それを機に日本各地で漢詩人が輩出されました。その後、大正期以降は下火になり、現在では愛好家など、一部の方の愛玩物として命脈を保っています。

現在の漢詩の世界はどのような状況でしょうか？

漢詩表現が拡散した時代ではないでしょうか。漢詩を素材とする芸術は、書道では書道家が表現を求め、漢詩に節を付けて詠む吟詠家もおります。また、その吟詠にあわせて踊る吟舞家は、その詩をいかに表現するかを常にこころ

がけています。

学校教育では、中学・高校の教科の一部で漢詩鑑賞が行われ、入試にも出題されます。漢詩の創作を楽しむ人々、漢詩人は、全国に組織されつつある漢詩連盟の活動が重要になっていと言えます。全日本漢詩連盟が結成され、今年10周年の記念大会を開催したところです。また、組織となっていない都道府県もみられますが、一般の会員は全国すべての都道府県で活動されており、いずれ漢詩愛好家はどんどん増えていくことでしょう。



「漢詩は書き直し、考え直しの推敲ばかりで……」とパソコンで制作に励む内藤氏
(全日本漢詩連盟理事)

県内の活動はどうでしょう？

全国的に見ても有力な漢詩会があり、活動が盛んな県のひとつですね。葦崎にある『葦崎漢詩会』は『山梨漢詩会』の支部の一つで、会員11名で会友の方も若干名あり、毎月の活動や県大会への参加など楽しく創作活動しています。

実は、漢詩は、個人で創作を楽しむ人が多い文芸といわれていますので、表面に現れてこない愛好家の方がたくさんいるのではと思っっています。それは、全国規模の漢詩コンクールなどの応募状況が多いことから、現れているような気がしますが。

鑑賞するときの見所などは？

石川忠久氏による記念講演は迫力に圧倒されると思います。特別賞の入賞作品は、節を付けながら詠う『吟詠』と呼ばれる方法による発表や、県内の有名な書家による毛筆作品を裏打ちした作品の展示などが予定されています。

また、石川文山氏の作品の『富士山』など、有名な作品を吟詠しながら舞う『吟舞』の発表もあります。漢詩は、聴いたり、見たりするだけでなく、『人生の指針』、『四季の移り

い』、『日本や中国の歴史の事実』、『人生の喜び楽しみ』などを感じていただけるのではないかと思います。

漢詩はどのように製作していくのですか？

文芸の世界は、どんなものでも盛り付ける器のようなものがあり、守らなければいけないルールがあります。それが格段に難しく、面倒であるのが漢詩です。ですから、ルールに慣れるまでは難しく感じますが、慣れてしまつと楽しみに変わってきます。

内藤さんが漢詩を作られる場合はどんなときでしょうか？また、何か変わったことは。

なかなか机の前に座つても、できるものではありませんね。いろいろなことに関心を持って、日々過ごしていくことが大切だと思っっています。旅行に行つたり、散歩しながら考えたりすることが多いです。四季折々の自然の移ろいから、発想がわくことが多いです。

漢詩をはじめたことにより、今まで何気なく見ていた『自然の見方』を教わつたような気がします。

「武田の里」にらさきが生んだ二人の偉人
小林一三・保阪嘉内の世界展を開催
列車を走らせた男の物語

阪急電鉄、宝塚歌劇団の創設者である小林一三。盛岡高等農林学校で宮澤賢治と出会い交流を深めた保阪嘉内。郷土出身の2人の偉人の業績をたどり、経済・文化の面から紹介する企画展です。

■日時 9月1日(日)～
11月10日(日)

月曜休館
9時～17時

※祝日の場合はその翌日

■場所

市民交流センター

「二二」1階

葦崎市ふるさと偉人資料館

※入場無料

世界展の開催に合わせ
記念講演を開催

□小林一三記念講演

■日時 9月8日(日)

13時30分～15時

■演題

小林一三「16歳の日記」

～葦崎から東京へ

新出資料の意義～

■講師

伊井 春樹氏

(逸翁美術館館長)

□保阪嘉内記念講演

■日時 9月15日(日)

13時30分～15時30分

■演題

花巻から葦崎へ

～宮澤賢治から保阪嘉内へ～

■講師

牛崎 敏哉氏

(宮澤賢治記念館副館長)

■賢治と嘉内の歌曲を聴く

ソプラノ歌手

土井尻 明子氏

□両講演共通事項

■会場

市民交流センター「二二」

3階多目的ホール

■定員

各回200名 ※入場無料

■お問い合わせ

教育課国民文化祭担当

(内線265)

郷土の偉人・小林一三翁の
生誕140周年を祝う

記念茶会を開催

明治6年(1873年)
1月3日、甲州葦崎宿河原部村(現葦崎市本町)で誕生した一三は、後に、表千家の宗匠に学び、茶人逸翁としても造詣が深く、古美術収集家としても知られています。

こうしたことから、翁の生誕140周年を記念して、翁を偲び敬つ、記念茶会を次のとおり開催します。

市民の皆様、お茶に親しむ方々などで、一三翁生誕記念を祝いましょう。

■日時 9月22日(日)

13時～15時

■会場 市民交流センター

「二二」1階和室

■参加費 無料

※ただし、定員300名になり次第、終了となります。

■お問い合わせ

企画財政課企画推進担当

(内線355)